幸せは少ししかいらない

如月ひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せは少ししかいらない

【Ｎコード】
Ｎ１６０６Ｄ

【作者名】
如月ひつじ

【あらすじ】
シリアス？コメディ？枠に収まらない物語が、引っ込み思案な性格のあやめと、彼女が兄のように慕う従兄の友則、二人の高校生を中心に展開します。

あやめの涙　（前編）

さわさわさわ……

六月も終わろうとしているこの季節。

温かい雨が降り続ける中、あたしはトモにぃの家の前にいた。

ピン、ポーン――

インターホンのボタンを押すのも三回目……たぶん誰もいないんだろうってわかってる。でもなにかしてないと、なにかにすがらないと、今にも胸を締め付ける苦しさに泣き出してしまいそうだった。

夢中で飛び出してきて、傘も持ってこなかったから高校の制服はずぶ濡れ。長袖のところがベッタリくっついて気持ち悪い。この前切ったばかりの髪だって、すっかり雨に濡れてぺったり額についてる。

四回目のピンポンを聞きながら、あたしはなんでここにいるのかな、って考えた。

トモにぃは本当は友則って名前で二つ年上の従兄で、小学校の頃はよく遊んでもらった。家が近いから、お互いの家にお泊りしたことだっていっぱいある。トモにぃが中学生になってからはあんまり遊ばなくなったし、お泊りだってしなくなったけど、あたしにとってトモにぃは優しいお兄ちゃん。なにかわからないことがあったり、心配なことがあったら今でもよく電話ごしに相談にのってもらう、そんな人。

トモにぃのお母さんはあたしのお父さんの妹で、あたしはお母さんよりも叔母さんに似ている。だからってわけじゃないだろうけど、トモにぃと同じくらいあたしに優しい人。

トモにぃのお父さんは寡黙な人で、なんだかお父さんってこうい

うもんなんだろうなぁって妙な納得をしちゃうような人。小さい頃は怖かったけど、何事にも動じないっていうか、怒ったところを見たことがないし、一度だけトモにぃに笑ってるのを見て、ほんとは優しいんだろうなぁって分かった。

ようするに、あたしにとってここはとても居心地のいい場所なんだ。

あたしは、そこに逃げ込もうとしているんだ。

自分の気持ちに気づいて、あたしは急に自分がイヤになった。

胸の前で人差し指を突き出していた手を握って下ろした。

……帰ろう。

小さくため息をついて、重たい足を持ち上げる。

「ため息ばっかりついてたら早く老けるぞって言ったろ」

回れ右の途中で、横から聞こえた言葉にあたしははっと顔を上げた。

真っ黒で大きな傘を差して、おっきなスーパーの袋を一つ持ったトモにぃがいた。

あたしよりずっと背が高くて（あたしが小さいからよけいになんだけど）、背中が広くって、手だって足だって大きい。叔母さんは体ばかり大きくなって困るなんて言ってるけど、トモにぃは心だってすっごく大きい。そうじゃなかったら、ちょっとは怖いと思うんじゃないかなぁ。

トモにぃはじっとまっすぐあたしを見て、ちょっとだけ悲しそうな笑顔になった。トモにぃの笑顔はいつも、どこか悲しそうなのだ。

「どうしたんだよ。着替えもしないで珍しいなぁ」

のたのたと歩いてきたトモにぃの顔が不満そうに歪んだ。ちょっと赤い唇を突き出して、すねた子供みたい。

「おまえ、びしょ濡れじゃないか……」

軒先の下まで、あたしの隣まで来て、トモにぃは傘を畳みながら

スーパーの袋をあたしの前に差し出した。
「ちょっと持ってろ」
あたしはおとなしくそれを受け取った。ずっしりと重い。片手じゃ持ちきれないから慌てて左手も添えた。袋の中は野菜とか果物とか、あとは一リットルの牛乳が二本。一本はトモにぃのかな。トモにぃは温めた牛乳が好きだし、牛乳に混ぜて食べるのとか飲むのとか、冷たい牛乳そのままなのも好きで、二日もあれば一本くらいなくなる。あたしはあんまり牛乳が好きじゃない。だから大きくならないんだってお母さんに言われたけど、あたしは別に大きくならなくってもいいから、無理に飲んだりしなかった。
「とにかく入れよ」
遠くでトモにぃの言葉を聞きながら、でも混ぜて食べるフルーツのは好きだなぁって考えてたら腕が軽くなった。
トモにぃは不思議そうな顔で、あたしの顔とスーパーの袋を掴んでいるあたしの手を見比べていた。あたしもつられて自分の手を見て、スーパーの袋にトモにぃの手がかかっているのに気づいた。トモにぃは袋を持っていけずに困っていたのだ。
「あ、あ、ごめん」
「おまえ、なんか変だぞ」
むすっとした顔でトモにぃは、あたしを玄関に押し込んでドアを閉めて鍵をかけた。
「早く頭拭けよ……いっそのこと、風呂でも入るか？」
「そこまでは、わるいよ」
あたしはあわてて断った。すぐ言わないと、トモにぃがさっさとお湯を沸かしてしまうかもしれなかったし、いくら従兄だからって二人っきりの家でお風呂に入るのは躊躇してしまう。
「そうか？　じゃ、せめて着替えくらいしろよ。隠したもんが見えてるぞ」
あたしはトモにぃの言葉の意味を考えて、もう少し考えて、ちらりと顔をうつむけた。

濡れた制服に、飾りっけのないブラが透けて見えた。
あたしに見えるってことは誰にでも見えるわけで、トモにぃは見たからあんなこと言ったんで、それからあたしはここに来るまで何人かとすれ違ったような気がする。そう考えたら、すれ違った人達がみんなあたしを見てたような気がしてきて、すっごく恥ずかしくなった。
あたしは急いで階段を駆け上がって、最初の部屋に飛び込んだ。
ここはトモにぃのお姉さんの部屋で、あたしがお泊りするときはいっつもここを使わせてもらっていたから、どこになにがあるのかだいたいわかっていた。お姉さんは県外の大学に行っていて一人暮らしをしているから、あんまりものは置いてなかったけど、可愛い小物が少しと、普段使うようなものはあった。
小さなタンスからタオルを取り出して、ちょっとだけ髪を拭いた。
そこで体がぶるっと震えた。お風呂、もらえばよかったかなぁ。
ちょっと考えて、制服を脱ぐことにした。
お泊りしたころはお姉さんの小さいころのパジャマをよく借りたから、もしかしたらそれがまだあるんじゃないかと思ったんだけど、懐かしいパジャマはもうなかった。
変わりに大きいパジャマがみつかった。お姉さんにはちょうどなんだろうけど、あたしにはいかにもぶかぶかだ。
おっきなパジャマと睨めっこしていたら、くしゃみが出た。
ええいと覚悟を決めて、あたしは制服も下着も全部脱いで、ちょっとモタモタしながら体を拭き終えると、すっかり冷えてしまい震えながらパジャマを着た。
パジャマは思ったとおりに大きかった。袖も裾も捲り上げたけど、やっぱりぶかぶかだ。
「うーん……っくしゅ」
またくしゃみがでて、あたしはあわててベッドに潜り込んだ。
お姉さんが春先に帰ってきてからそのままなのか、毛布が出たまま
まだったのがありがたかった。

毛布にくるまって体を丸めてぶるぶるしていたら、階段を上ってくる足音が聞こえた。
トモにぃだと思った。トモにぃの歩き方は特徴的だったから、聞き間違えようがない。
「入るぞ」
外からの声はやっぱりトモにぃのものだった。
あたしがちょっと考えているうちに、ドアが開く音がした。
「ああ！　ちょっ、あっ、だめぇ！」
あたしは自分が脱ぎ散らかした服がそのままなのを思い出して叫んでいた。
トモにぃは目をぱちくりとさせてから、床を見て、またぱちくりと瞬きして、なにもなかったように部屋に入ってきた。
「ほい、お茶」
あたしが自分でもわかるくらいに顔を茹で上がらせているのに、トモにぃは笑顔でマグカップを差し出してきた。受け取ると、マグカップを持っていた手があたしの髪をくしゃくしゃと撫でた。
あたしは髪を撫でられるのが嫌いじゃなかったけど、同時に恥ずかしく感じるようにもなっていた。
「トモにぃ……」
あたしの消極的な不満の声に、トモにぃの手は素直に退いていった。
「ちゃんと髪、乾かさないと風邪ひくぞ」
「うん」
頷いてマグカップに口をつけた。熱すぎない番茶を飲み込むたびに、温かさが体にじんわりと広がっていく。
「おまえの服さ、制服は乾かすとして、下着は洗っとくぞ」
トモにぃのとんでもない言葉に、あたしは思いっきり咳き込んだ。
「おいおい、大丈夫か？」
「いくらトモにぃでもしていいことと悪いことが……」
「濡れた下着、洗うことのどこが悪いんだ？」

あくまで不思議そうなトモにぃにあたしはもうなにも言えなかった。
考えてみれば、トモにぃは家事をすることが多いし、お姉さんの下着だって平然と洗ってきたんだから、あたしの下着だって洗濯物に違いはないんだろうと思う。
ちょっと悲しいけど……
「洗っとくからな。それでよ、今日は泊まってくのか？」
何気ない一言に胸がつくんと痛んだ。
そうだ。帰ろうと思ったのにあたしったら家に上がって、しかもパジャマ勝手に借りてベッドに入ってお茶までもらって下着洗われようとしてるんだ。それでもって、泊まっていくのか聞かれて嬉しいなんて考えて……どうしてここに来たのかを思い出して胸が痛んだ。
あたしが高校から帰ると、お母さんが電話していた。お母さんは電話の相手と喧嘩してた。たぶん、お父さんと……
ここ最近、二人は喧嘩ばっかりしてる。
あたしはお母さんの口からお父さんを罵る言葉を聞きたくなくって、夢中でここに来たんだった。
「うううー……」
「帰りたくないのか？」
トモにぃはたまに鋭いことを言って、あたしは感心してしまう。
でも今度ばかりは、ぎゅって胸を掴まれたみたいに苦しくなって、それどころじゃなかった。
今度のことで傷ついてるあたしの気持ちに気づいてもらえたのはこれが初めてだった。
「……うん」
コクンと首を振ったら、ピトっと音がした。
ピト……ポトン……

お茶に水滴が落ちて音を立てていた。
視界がぼやぼやーっとしてきて、泣いているんだなぁって、他人事みたいに気づいた。
「じゃあ、おまえんチに電話しとくから。オヤジとオフクロには俺から適当に説明しておくし……」
トモにぃの背中もぼやけて見えた。
静かにドアが閉まって、あたしは自分が一人でいることを強く意識した。
お茶の残りを飲み干して、マグカップを机に置いた。
あたしはもう一度毛布に包まって、今度のことでは初めて声を上げて泣いた。

あやめの涙　（後編）

気がつくと部屋は真っ暗だった。
あったかい毛布にくるまったままで、あたしはぼーっと天井を見つめた。
思いっきり泣いて、それで疲れてしまって、寝ちゃったんだ。
すっかり温まった体は重くって、気だるくって、あたしは再び意識が沈んでいくのを感じた。

トントン

ノックの音に少しだけ呼び戻された。けれども、すぐに落ちていきそうな浮遊感のせいで返事もおっくうだ。
「起きてるか？」
トモにぃの遠慮がちな声に、あたしは一気に目が覚めた。
「うん」
返事をするとすぐにドアが開いた。
廊下の明かりに照らされたトモにぃの影があたしを包み込む。
パチっという音がして、電気がつけられた。
突然明るくなって、あたしは「うー」っとうめいて何度か瞬きした。
「晩メシ、持ってきたぞ」
お盆を片手にのたのたとやってきたトモにぃは、机の上にそれを置いてさっさと出て行こうとした。
「トモにぃ……」
「なんだ？」
顔だけ振り返ったトモにぃに、あたしは困ってしまった。別になにか用事があって声をかけたんじゃなかったからだ。
じゃあどうして声なんてかけたんだろうって考えて、考えがまと

まらなかった。
なんとなく、一人になりたくなかった。それだけのような気がする。
「えと、えとね。ありがと、ゴハン」
トモにぃはちょっとだけ不思議そうに眉を持ち上げた。
「そんだけか？」
「あ、あと……いっしょに食べてほしいんだけど」
「俺はもう、食べたんだけどな」
そう言ってトモにぃは部屋を出て行こうとした。
と思ったら、閉まりきっていなかったドアを閉めに行っただけだった。
「なんか、話でもあるのか？」
あたしは言葉につまってしまった。本当に、別になにも考えてなかったのだ。
机の前にどかっと座ったトモにぃは、不機嫌そうに頭を掻いて、あたしに手招きした。
「まあ、なんだ。冷めるぞ」
「うん」
あたしはのたのたとベッドから降りてトモにぃの前に座った。
トモにぃは下唇をちょっとだけ突き出してそっぽを向いていた。
「どうかした？」
トモにぃはあたしをちらりと見て、また目をそらした。そしてぼそりと言った。
「おまえに姉貴のパジャマはでかすぎるな」
あたしは顔が熱くなるのを感じた。
また見えていたのかな、と頭の片隅にひらめいた。
なるべくゆっくりと、慌てているのを悟られないように胸元を見た。
パジャマは、ちゃんとあたしの体を隠していた。見えていたわけじゃないみたいだ。

じゃあなんで、トモにぃはあたしを正面から見ないんだろう？
「おまえさ。あんまり前かがみになるなよ」
トモにぃの言葉にあたしはちょっと考えた。もしかしてと思うことがあった。
パジャマの胸元を摘んで、ちょんと前に引っ張った。
あたしは今度こそ顔が赤くなったと思う。
パジャマの襟元が開いて、しっかりと見えたのだ。ちぃさいのが……
「み、見えてた？」
「ちらっとな」
トモにぃが気恥ずかしそうに笑ったのを見て、あたしはどうしようもなく恥ずかしくてたまらなくなった。さっきよりも顔が熱くなって、鼓動がバクバクドクドク耳にうるさい。
「とにかく、冷めないうちに食べろよ」
「う、うん」
頭の中で「トモにぃに見られた」という言葉がぐるぐると回っていて、いつもなら美味しいはずの野菜炒めもサバの味噌煮もさっぱり味がわからなかった。
あたしはゴハンを食べるのが遅い。中学校の時なんていっつも最後だったし、高校でも食べるのを少しにしないと休み時間が終わってしまうのだ。
だけどこのときは早かったような気がする。味はわからないし、とにかく早く食べ終わろうと躍起になってた。
黙々と食べること三十分、ちょっとぬるくなったアサリのお吸い物を飲み干した時には、ずいぶんと落ち着いていた。
トモにぃは相変わらずあたしから視線をずらして、手持ち無沙汰に腕を組替えたりしていた。
「トモにぃ。叔父さんと叔母さん、なにか言ってなかった？」
「オヤジは別になにも。オフクロは、心配してたけどな」
「あたしんチは？」

「伯母さんが、ごめんなさいね、ってそれだけ」
「うん。ゴメンね」
「……そうだな」
そう言ってうつむく直前、トモにぃの顔は怒っているように見えた。
「今日は、もう寝ろ」
トモにぃは床に手を突いて立ち上がると、食器を載せたままだったお盆を持って出て行ってしまった。
あたしは、なんだかトモにぃに突き放された気がして、今度こそ何も言葉が出てこなかった。
パタンと閉まったドアを眺めて、はぁと言ってみた。
本当のため息と違って、心にたまった重いものを吐き出せるかと思ったんだけど、うまくいかなかった。

……寝よぅ。

全然眠くはなかったけど、なにもすることはないし、なにも考えられそうになかったから、とにかくトモにぃに言われたとおりにしようと思った。
ベッドに寝転がって毛布にくるまって、ちょっとだけ考えてから枕を抱き寄せた。自分でも子どもっぽいと思うけど、こうしていると安心するのだ。ずっと子どもの頃、よくお母さんと一緒に寝ていたのを思い出す。

――あやめ、寝る前に歯を磨こうね。

幼いあたしは歯磨き粉が嫌いで歯磨きを嫌がったものだった。今じゃしないと気持ち悪いのに……
「……あっ」
歯磨きしてないことを思い出したついでにお風呂もまだなのに気

づいてしまった。
「まいっか……」
歯ブラシはないし、お風呂だって明日の朝に入ればいいじゃない、と自分に言い訳をして寝よう眠ろうと言い聞かせる。
「ううー」
眠ろうとすればするほど寝付けなくなった。
こういう時はどうするんだっけ。
昔っから羊を数えると眠くなるって言うけど、あれは絶対に嘘だ。頭のなかに羊さんがいっぱい出てきて楽しいけど、眠くなんてならないもの。そもそも眠る時に羊を数えるのって英語話す人の国の話で、スリープとシープが似てるからってトモにぃが教えてくれたっけ。そぅいえば、シープのつづりってどんなだっけ……
「ううぅ」
だめだ。眠くなるどころか、スペルが気になって気になってしょうがない。
そこに階段を上がってくるトモにぃの足音が聞こえた。
そうだ、トモにぃに聞けばいい。あたしはベッドから這い出して、パジャマが乱れていないかを確かめた。うん、大丈夫。
そうこうしているうちにトモにぃの足音は部屋の前を行き過ぎようとしていた。
あたしは急いでドアを開けてトモにぃの姿を探した。でも、目に入ったのはトモにぃの部屋のドアが閉まるところだった。
「あっ……」
どうしよう。心の中で呟いて、あたしは自分でどうしてそう思ったのかわからなかった。
トモにぃは部屋にいるんだし、行って聞けばすむことじゃない。
すぐに気分を切り替えてトモにぃの部屋の前に立った。
今度は、ノックしようと上げたこぶしが、どうしてもドアを叩くところまで動かなかった。
いったい何を躊躇しているんだろう？　考えても答えは出なかっ

た。
ええいと覚悟を決めてノックする。
コンコンって音が廊下に広がって溶け込んでしまわないうちに、ドアが開いた。
「眠れないのか？」
ぼーっとした顔だけを覗かせたトモにぃに、あたしはコクンと頷いた。
「あのね……」
「まぁ、入れよ」
羊の英単語って、と続けようとした言葉をあたしはぐっと飲み込んでしまった。
さっきからあたしを戸惑わせていたものがわかった。
あたし、トモにぃをヘンに意識しちゃってるんだ……どうしよう。
「ほら早く」
トモにぃにうながされて、あたしは考えも半分で部屋に入っていた。
ドアが閉まる音に、唐突にトモにぃと二人だけっていう状況を実感してしまって、あたしは羊の英単語なんてすっかり忘れていた。
部屋はお姉さんのと同じ作りで、同じくらい片付いていた。
友達の話だと、男の人の部屋にはエッチな本とか隠してあるっていうけど、そういうのって想像できないな。でも、やっぱりトモにぃも持ってるのかな……
あたしはぶんぶんと首を振ってヘンな考えを頭から追い出そうとした。
何気に目が止まった机の上には数学の教科書があって、シャーペンとか消しゴムとかがあった。
「勉強してたんだ」
「冬には受験だからな」
「あ、ゴメンね」
「まだ始めてなかったから気にすんな。そんなことより、なにがあ

ったんだ？」
あたしはまだ半分上の空で、トモにぃの聞きたいことがかわらなかった。
ポカンとしていたら、トモにぃの顔が真剣なものになった。
「……伯父さんと伯母さんのことか？」
少しトーンが下がったトモにぃの言葉に、あたしは思わず顔をしかめていた。突如押し寄せた苦しさに泣き出しそうになるのを堪えた。
「そうなんだな？」
トモにぃの顔には同情も気遣いも好奇心もなくって、ただただまっすぐあたしを見ていた。
あたしは、うんと頷こうとして、
「んー……」
半分も声にならなかった。
声になったのも、泣き声だった。
自分でも不思議なくらいに涙があふれて、せっかく堪えていたのに顔なんかたぶんひどいことになってて、顔を隠そうにも体が強張って腕が持ち上がらなかった。
ぼやけた視界にトモにぃの手が伸びてきて、あたしの頭を撫でてくれた。
太くて硬くて温かい指が髪を掻き分けてくるのが気持ちよくて、あたしの泣き止もうとする気持ちはもっと甘えたいに変わっていた。
「おっかあさんがねっ、おとっさんを、んぅっ、わるくいう、のっ」
誰にも言うまいと思っていたことが、しゃっくりまじりだけど、すらすらと口をついて出た。
昔から女の人にだらしなかったお父さんと、それを知っていながら特別気にしてなかったお母さん。だからって夫婦仲が悪いわけでも冷え切っているわけでもなかったから、あたしは夫婦ってそういうのもあるんだなぁって思ってた。
それがここ一ヶ月ほどで、小言の一つも言わなかったお母さんが

お父さんを罵ったり、夜遅くなっても必ず帰ってきていたお父さんが何日も帰ってこないということが起き始めた。
あたしはずっと今まで二人とも好きだったから、お母さんがお父さんを酷く言うのが耐えられなかった。
そして、あたし自身が少しずつお父さんを嫌いになっていくのが嫌だった。
昨日、学校から帰るとお父さんがいて、いつになく深刻な顔をしていた。

――あやめは、お父さんとお母さん、どっちのほうが好きなんだ？

あたしは何も言えなくって部屋に閉じこもった。
そして今日、学校から帰ったらお母さんが受話器に叫んでいた。

――あの子のことを考えているの！？

これまでのことが、どういうことを意味していたのかをあたしは知った。ううん……ほんとは前から気づいていたのに、気づかなかったフリをしていたんだ。
心にあきらめが急激に広がる痛みに、あたしはそこから逃げ出した。
「ねぇ、トモにぃ。もう、ダメなのかなぁ……」
話していくうちに、涙のほうは止まっていた。
残ったのは、胸を締め付ける痛みだけだ。
トモにぃはあたしの髪をくしゃくしゃと掻き混ぜると、あたしの頭を優しく叩いて腕を組んだ。
「いいか、伯父さんには伯父さんの、伯母さんには伯母さんの人生がある」
「うん」
だからあきらめろってことなの……頭ではわかっていたけど、納

得はできなかった。
　トモにぃが悲しそうに笑った。
「あやめ、おまえにはおまえの人生がある。その人生には、伯父さんと伯母さんもいるし、ほかの人も、俺だっている」
「……うん」
「おまえの人生を決めるのはおまえなんだぞ。他人の人生に遠慮なんかするな。ちゃんと、伯父さんと伯母さんに、別れて欲しくないって言ったのか？」
　そんなこと、考えもしなかった。あたしは、お父さんとお母さんのいさかいから目を逸らそうとしていたから、自分から関わろうなんて思いもしなかった。
　だけど、言われてみて気がついた。
　あたしがしたかったことは、まさにそれだったんだ。お父さんとお母さんに別れてほしくない。昔みたいに仲良くいてほしい。あきらめたくない。
　今までそうしなかったことの後悔が胸にわいて、また涙が込み上げてきた。
「ううん」
　首を振ったあたしの頭をトモにぃがポンと叩いた。
「じゃあ明日言うんだぞ」
　あたしが頷くと、トモにぃは満足そうに笑って手を引っ込めた。
「することが決まったんだから、今日はもう眠れるよな？」
　あたしは目の周りを手のひらでグジグジと拭いながら頷いた。
「トモにぃ」
「ん？」
「ありがとね」
「お、おう」
　ちょっと上擦ったような声だった。
　トモにぃが照れているような気がした。
　まだ顔を覆っていた手をずらして急いで見上げたけど、その時に

はトモにぃはいつもの笑顔であたしを見ていた。

お姉さんの部屋に戻ってベッドにもぐったあたしは、明日どういうふうに言ってお父さんとお母さんを説得しようか考えているうちに、いつの間にか眠っていた。

ヘンな夢を見てうなされる事もない、深い眠りだった。

いつのまにか目が覚めて、あたしは胸に手を当てて考えた。

お父さんのこと、お母さんのこと、自分のこと……家族のこと。

大丈夫だ。もう、怖くない。

……帰ろう。

昨日と同じ言葉を心の中で呟く。

だけど、それは自己嫌悪からじゃなく、あたしが前向きに生きることへの決意の言葉だった。

あたしは居心地のいい場所を出て、つらいことが待っているとこに戻ろうとしている。

もしかしたら、本当につらいだけになるかもしれない……

そんな不安は、けれどももうあたしを怯ませたりしなかった。

あたしには、トモにぃが気づかせてくれた道がある。それに、いつだってあたしの心にはトモにぃがいる。

あたしにはそれだけで十分だ。

あたしの制服は居間の鴨居にハンガーにかけて吊るされてあった。下着はソファの上にきちんとたたんであった。きっと叔母さんがたたんでくれたんだろうと考えることにした。間違ってもトモにぃがしたとは考えたくなかった。

トモにぃがあたしの下着をたたむ姿をちょっと想像してしまい、顔がかーっと熱くなった。

あたしは首をふりふり妄想を頭から追い出して、パジャマを急いで脱ぎ捨てた。
家の中は静まり返っている。まだ新聞を配っているような早朝だから、誰かが起き出してくる心配はなかった。
さっさと制服を着て、パジャマを綺麗にたたみ、ソファに置いた。
なるべく音を立てないようにそろそろと玄関を出た。
「うん……」
雨上がりの世界は光に満ちていて、あたしはまぶしさに目をほそめた。
空はどこまでも青々と晴れ渡っていた。
たまに訪れる梅雨の晴れ間は、まるであたしの心を映しているようだった。

それでも明日になっていく　（1）

終礼が終わって、先生が教室を出て行ったのを確認して、あたしは鞄から携帯電話を取り出した。

電話とメールの着信を知らせるマークを見て、まずは着信履歴を開く。新しい履歴は、お父さんとお母さんの携帯電話からだった。それぞれ昼休みの時間に一件ずつ。でも、留守電にメッセージはなかった。

今度はメール受信箱を開いた。一通の新着メールがあって、送信者はお母さんだった。

大事な話があるから学校が終わったら家で待っているように、そんな内容だった。どんな話だろう。どうしても悪いことのように思えてしまう。

携帯電話をメニュー画面に戻して机に置き、あたしは机の中から勉強道具を取り出しては鞄に詰め始めた。

「うーちゃん、傘持ってきたー？」

明るい声に振り向くと、ネネちゃんがにこにこと笑って立っていた。両手を後ろで組んでいるみたいで、スカートの横から鞄がぴょこぴょこと見え隠れしている。

あたしは少し思い出して、

「うん。ロッカーに置き傘してるよ」

「あ、そーなんだ。じゃあ、駅まで入れてー。わたし忘れちゃったんだっ」

はてな、と思った。さっきまで晴れていたように思っていたけど。窓から外を見ると、明るい雲からパラパラと雨が降っていた。梅雨だから仕方ないけど、一日中晴れている日があってもいいのにな。

「うん。いいよ」

返事をしながら振り返ると、ネネちゃんの後ろに矜ちゃんが黒板消しを手に憮然とした顔で立っていた。外からの光を受けた眼鏡の

せいで表情が半分も見えなかったけど、そんな気がした。
「ネネ。その手に持っているものは何だ？」
「番長！？」
顔だけ振り返ったネネちゃんは、三四歩ほど後ろ歩きした。そうしてあたし達から離れてから、鞄を持った右手を前に突き出した。左手は背中に隠したままだ。何を持ってるんだろ？
「ほら、鞄だよー」
「どう見ても怪しいでしょ。うーちゃんもそう思うよね？」
あたしは矜ちゃんに頷き返してから、ネネちゃんを見た。
ネネちゃんは一所懸命な顔で、さっき突き出した鞄をまだ胸の高さに持っていた。ちょっと腕がぷるぷるしている。重そうだ。
「ほら、よくわからないことしてないで、左手の物を見せて早く楽になったら？　だいたい、私はもう見て知ってるんだからね」
矜ちゃんの優しく諭すような言葉に、ネネちゃんは鞄を下ろして、左手をおそるおそるといった感じで見せてくれた。手に持っていたのは、薄桃色の折り畳み傘だった。
「番長のいぢわるっ」
「誰が意地悪よ。ネネこそ、なんで傘を忘れたなんて言ったの？」
「……番長のいぢわるぅっ！」
そう言ったネネちゃんは教室の後ろまで走って、
「どうしたの鈴木さばっ」
そこにいた佐竹君にぶつかって突き飛ばしたように見えた。佐竹君が教室後ろのロッカーに当たって大きな音がして、驚いたあたしは体がビクッってなった。佐竹君、大丈夫かな。
「おーいサタケ、大丈夫か？」
矜ちゃんが心配そうに聞こえなくもない声をかけたら、床にうずくまって頭を抱えていた佐竹君がよれよれと体を起こした。
「痛いけど、だいじょうぶだよ」
「そーかー」
矜ちゃんは体から力を抜くように息をついて、教室の後ろの出入

口を見た。そこには誰もいなかった。騒然とした教室に、ネネちゃんの姿はどこにもなかった。
あたしは立ち去り際のネネちゃんを思い出してみた。私の見間違いじゃなかったら、
「ねえ矜ちゃん」
「なあに？」
「ネネちゃん、泣いてなかった？」
振り向いた矜ちゃんの目は、宇宙人を見つけた人みたいに大きく開いていた。それはほんの一瞬のことで、すぐにいつもの冷静でどこかひょうひょうとして見える顔つきに戻った。そうすると、美人顔の矜ちゃんは少し冷たい印象になる。
「何かの見間違いでしょ。もう丸二年は付き合ってるけど、あのコが嘘泣き以外で涙を見せたなんて聞いたこともないよ」
その表情と声は、ネネちゃんが泣くことなんてないと信じているようだった。ううん、信じるまでもないって感じだ。晴れた日の海は青い、そんな事実を口にしているみたいだった。
あたしとネネちゃん矜ちゃんは、高校に入学してから知り合ってまだ二ヶ月ちょっとしか経ってない。だから矜ちゃんが違うって言うなら、さっきのは見間違いだったのかもしれない。でも、ネネちゃんはいつも明るいし突飛なことを言ったり変わってるトコがあるとは思うけど、心が痛い時は涙が出ちゃったりするんじゃないかな。泣かないなんてこと、ないと思う。
あたしがじっと見ていたら、矜ちゃんが不意に微笑んだ。とっても優しくて、温かい笑顔。あたしは矜ちゃんの笑顔が好きだ。素顔とでギャップがあるところなんて、お母さんとおんなじで……
「ねえ、うーちゃん。ネネのやつ、下駄箱のとこで待ってるような気がする。私は日直の仕事あるから、悪いんだけど駅まで一緒に行ってあげてくれない？」
「え、あ、うん。いいよ」
「ありがと。じゃ、またね」

「うん。またあした」
黒板掃除に戻る矜ちゃんを見送って、勉強道具を移し終えた鞄を片手に置き傘を取りに教室の後ろまで行くと、そこには後ろ頭を撫でている佐竹君がいた。
まだ痛そうにしているのでなんとなく見ていたら目が合い、佐竹君が挨拶のような笑顔を浮かべたので、あたしも笑顔を返した。それから何か声をかけようかどうしよかと考えていたら、佐竹君は教室を出て行ってしまった。
あたしは浅く息を吐いた。普段から話をしない相手に自分から話しかけるのって、とっても難しい。

置き傘にしていた黄色のジャンパー傘を持って校舎の玄関に行くと、下駄箱に背中を預けて顔をうつむけているネネちゃんがいた。たまに顔を上げては帰っていく人達を横目に見送っている姿は、なんだか一人ぼっちだ。
「……ネネちゃん」
「うーちゃん」
顔を上げたネネちゃんは、いつものようにニコニコ笑顔だった。あたしには、いつもと変わらない笑顔に見えた。
「番長は？」
「日直の仕事があるから先にって」
下駄箱から外履きの革靴を取り出して上履きと履き替える。
「そっか」
脱いだシューズを下駄箱にしまいながらチラッと見たネネちゃんは、やっぱり笑っていた。
「それで黒板消し持ってたのかー。てっきり、投げつけるためかと思ったよっ」
「えー？」
「番長は強肩だよっ。中学のとき、ハンドボール投げで百メートルとか投げてたよっ」

あたしの記録は十一メートルくらいだったと思う。矜ちゃん、すごいなぁ。
「だからね、番長が片手で持てる物は全部飛んでくるかも知れないんだよー」
「あはは。でも、矜ちゃんはそんなことしないでしょ？」
ネネちゃんは笑顔のままで何度か瞬きをした。
「うーちゃん。メガネ番長のあだ名は伊達じゃないんだよ」
そう言ったネネちゃんの声は、いつもの弾むようなリズミカルなものではなく、すごく平坦で落ち着いていた。すごく、ドキリとした。
「あのメガネは伊達だけどね」
「えと、ダテなの？」
「うん。伊達だよっ」
もういつもの調子で楽しげに笑うネネちゃんを、あたしは少しぼんやりと見ていた。さっきのネネちゃんは、なんだったんだろうと思いながら。前フリかな、笑いの。
「そんなことより、帰ろー」
ネネちゃんが鞄を脇に挟んで折り畳み傘を広げ始めたのを見て、あたしは教室でのことを思い出した。
「ネネちゃん」
「んー？」
「入ってく？」
「え？」
手を止めて顔を上げたネネちゃんは、あたしが少し持ち上げて見せた傘に視線を落として、あたしの顔と傘を何度か交互に見た。
「や、や、あー、じょうだん？」
あたしは「ううん」と鼻を鳴らして首を振った。
ネネちゃんはあたしから目をそらせて、外のほうを見た。はぁ、とため息をして、折り畳み傘を畳み始める。
「ついてないなぁ」

呟きにネネちゃんと同じほうを見ると、雨はすっかり上がっていた。雲の切れ間から、光が差している。
「行こっ」
振り返ったネネちゃんは、やっぱりいつもの笑顔だった。
二人並んで、雨に濡れた前庭を歩いた。あたしは水溜りを避けながら、そんなことを気にしないネネちゃんに遅れないように少しだけ急いだ。
校門を抜けると、長い下り坂が始まる。高校はちょっとした丘の上にあって、交通機関は長い坂道を下りていかないと何もない。別の高校に行った友達の話では、そこには学校専用のバス亭があるそうだ。バス通学のあたしには、うらやましい話だった。
ということを言ったら、ネネちゃんは少し首を傾げた。
「確かにこの道は長くてうんざりかもっ。夏は暑くて死にそうになるかも。冬は雪で滑って危ないかもー……でもね」
ネネちゃんが少し腰を屈めた。あたしよりこぶし一つ高かった目線が一緒になる。それから覗き込むように顔を近づけられて、あたしは少しドギマギしてしまった。女の子同士でもあたしは恥ずかしく感じてしまう。ネネちゃんは平気みたいだ。
「こうやって話すこともできなかったし、ここの商店街にある店にだって行くことなかったと思うよ。それって、なんだか損なことじゃないかなっ」
「あ、うん。そうだね」
「ようしっ、今日は水月堂のおまんじゅうを食べよー」
そう言って、ぶんと振り上げたネネちゃんの手の先で、がしゃんと音を立てて折り畳み傘の柄が伸びた。
「え？」
勢いのついていた折り畳み傘は、伸びただけでは納まらなかった。ネネちゃんの手からすっぽーんと飛び出して、ずいぶん先のほうまで転がってから止まった。
ネネちゃんは空になった左手を振り上げた格好のままでわきわき

と動かした。
「うん。これは危ないから二度としないよっ」
決心めいた表情のネネちゃんに、あたしはなんとか笑顔を作って頷いた。ほんと、誰にもぶつからなくて良かったと思う。
転がった傘のところまで、あたし達は何も喋らずに歩いた。ネネちゃんは少しだけ早足で、なんだかそわそわしているように見えた。
傘を拾い上げたネネちゃんは、今度は胸の前でぐっと傘を握った。
「じゃああらためて、番長がいないから水月堂のおまんじゅうを食べに行こっ」
さっきとは微妙に違うセリフに、あたしは少し頭をひねった。あ、矜ちゃんがいないのが理由になってる。水月堂は丘を下りて十分くらい歩いた商店街にある和菓子の老舗で、矜ちゃんは和菓子が苦手だから、いないときに水月堂を選ぶのはいいと思うけど……あれ、同じことなのかな。
「どうかした？」
「んーん。なんでもないよ」
「そう？」
くりくりした目に見つめられて、あたしはまたちょっとだけ恥ずかしくなってうつむいた。ネネちゃんが特別どう、ということはないと思う。単にあたしが人から注目されることに慣れていないだけだ。
「なら、いいけどー」
のんびりした声に顔を上げると、ネネちゃんはもう歩き出していた。
ネネちゃんの少し後ろを歩きながら、水月堂に行ったらおまんじゅうと草団子を買おうと考えていた。草団子は家族の分だ。あたしの家族は食べ物の好みだけは似ていて、お菓子なら草団子が好物だった。お父さんが仕事帰りに買ってきて、お母さんがお茶をいれてくれて、三人で食卓に並んで食べる。今では、もう懐かしい思い出だった。

「ねえ。副長は大丈夫だった？」
少し遠くから聞こえた声に視線を向けると、ネネちゃんは振り返らずに歩いていた。ネネちゃんが相手の顔を見ないで話しをするなんて少し珍しい。
「うん。痛そうにしてたけど、大丈夫だって言ってたよ」
「ふーん」
ネネちゃんが歩調を緩めたので、自然と追いついたあたしは隣を歩く顔をうかがった。ネネちゃんも振り返ってきたので目が合った。すごく楽しそうな顔をしていた。つられてあたしも笑っていた。
「うーちゃんが聞いたの？」
一瞬、なんの話かわからなかった。ネネちゃんの質問は、あたしにとって突然なことが多い。少し考えれば思いつくのだけど。
「……あ、違うよ。聞いたのは矜ちゃん」
「だよねっ」
うんうんと頷きだしたネネちゃんは、なんだか安心しているみたいだった。あたしが佐竹君を心配して声をかけていたら、心配なことがあったのかな。そう言えば、ネネちゃんは前から佐竹君に変なことをよくしている。
「どうして佐竹君にああいうことするの？」
「んー？　今日のはたまたまだよっ」
「今日のじゃないのは？」
「副長見てたらしたくなるんだよっ」
佐竹君は身長は平均的で、体の線は少し細め。子どもっぽいような女の子っぽいような顔立ちのせいかちょっと弱々しく見えて、あたしなんかは親近感があるのだけど、ネネちゃんにとっては、その、苛めたくなるところなのかも知れない。委員の仕事を一緒にしている矜ちゃんの話では、事務仕事をしっかりこますし面倒見もいい人らしいけど、普段の様子からは想像しにくい。
「うーちゃんは？　副長のことどう思う？」
「……えーと、頼りないけど優しい人じゃないかなぁ」

「そういうことじゃなくってっ」
「……あー。えと、あの、どうって聞かれても困るよぅ」
ネネちゃんが聞きたいのは、恋バナ的なあたしの気持ちなんだろうけれど……佐竹君のことを、というかクラスの男子を恋愛対象として考えたことなんてないから、いきなり聞かれても考えなんて出てこない。そもそもあたしは恋愛ってよくわからない。友達の話では、とても幸せで、とても苦しいことらしい。その好きって感情は、お父さんを好きとか、トモにぃを好きって思うのとはきっと違うんだろうとまではわかるのだけど。
考えながら、あたしの頬は少し温かくなっていった。恋愛について考えるのは、だいぶ恥ずかしい。
ネネちゃんを見ると笑顔がにやにやになっていた。
「困るんだー」
からかうような響きに、あたしの頬は熱くなった。
「ちがうよ！　そんなんじゃないよ」
「ふーん？　そんなのってどんなのー？」
「だからっ……」
あたしはどうやったらネネちゃんに納得してもらえるかを考えた。けれど、ぜんぜん言葉にならなかった。悔しくて「うー」と呻き声がもれてしまった。
「わかってるよっ。うーちゃん」
ネネちゃんが頭をぽんぽんと優しく叩いてくれた。ほんとに分かってくれたのかな、と思いながら見つめると、ネネちゃんはすごく楽しそうな笑顔になった。
「もし気になる人ができたら教えてねっ。わたし、協力するよっ」
どうやら佐竹君を特別に気にしていないことは分かってくれていたみたいだ。
「……うん」
「よしっ」
もう一度あたしをぽんと叩いて、ネネちゃんはさっきまでより元

気よく歩き始めた。あたしも遅れないようについて行く。

下り坂は、まだまだ続いていた。

それでも明日になっていく　（2）

家に帰ったら、玄関にお母さんの靴があった。きっちり並べて置いてある。今朝最後に出たのはあたしで、その時にはなかったから、もう帰ってきているみたいだ。

「あやめ？」

声が聞こえて、あたしは下駄箱から自分のシューズを出し、代わりに脱いだ靴をしまってからリビングに向かった。

「ただいま」

お母さんはブラウスにジーパン姿で、二人掛けソファの肘置きに寄りかかるようにして座っていた。会社に行く時にはいつも頭の後ろで留めている長い髪を、今は解いている。いつもなら、夕飯を食べてお風呂に入るまではまとめたままにしているのに。

「おかえりなさい。あら、何か買ってきたの？」

「うん。草団子だよ」

「大事な話があるってメールしたのに、寄り道してきたのね。まあいいわ、別に道草しちゃダメなんて書かなかったし。ああ、道草して草団子なんて洒落てるかも。でも、どうせならケーキを買ってきてほしかったな」

そう言ってお母さんは、疲れているのか、ゆっくりと立ち上がってキッチンに向かおうとした。

「お母さん」

「なに？」

「お団子、お父さんのも買ってきたから……」

立ち止まって振り返ったお母さんは、ほとんど無表情だった。不機嫌を隠した顔だ。

「お父さんもすぐに帰ってくるよ。今日は大事な話があるって言ったでしょ。着替えてらっしゃい。おとといのように新山の家に行っちゃダメよ」

お母さんがキッチンに行って、自分が緊張していたことに気づいた。
あたしはため息をついて硬くなっていた体から力を抜き、草団子の包みをテーブルに置いて、自分の部屋に着替えに向かった。
大事な話は、家族がそろってからするのだろうか。とても嫌な予感がする。
トモにぃが気づかせてくれた、あたしがしたかったことはまだできていない。すっかり険悪になった二人に、別れないでほしいと言うこと。それがあたしのしたいこと。昨日はお母さんが帰ってきたのが夜中で、起きて待っていたあたしを叱ったら寝てしまったし、今朝はあたしが起きる前に出かけてしまっていた。お父さんは、もう三日も顔を見ていない。
自分の部屋で制服から薄い黄色のワンピースに着替え、次は洗面所に行く。鏡に映ったのは、あまり物を考えていないような脳天気な顔だった。力を入れて、しかめっ面を作ってみたけど、うまくいかない。不機嫌というより、すねてるみたいだ。今度は笑ってみた。笑顔なら、こんな簡単に作れるのに。
無意味な笑みをやめ、ポンプ式容器から泡状の石鹸を出して、手のひら、手の甲、指の間、手首までをさっとこすってから流し、両手の平で受けた水を口に含んで軽くうがいをした。さらに水だけで顔を洗った。
タオルでぬぐった後、鏡に映った顔は、やっぱりのほほんとしていた。
リビングに戻ると、お母さんはソファに横になっていた。背もたれ側の右手を額に当てて目を閉じ、左手をだらんとソファからこぼしていた。やっぱり疲れているのかな。こんな姿はあまり見たことなかった。
あたしはコーヒーテーブルを挟んだ向かい、カーペットの上にぺたんと座った。
「お母さん、大丈夫？」

「大丈夫と言えば大丈夫よ。けど、限界と言えば限界ね」
目を開けてこっちを見たお母さんは、ちょっと笑顔になって、
「二日酔いで仕事なんてするもんじゃないわ。あなたは飲まされる酒とは無縁の人生を歩みなさい」
よく分からないアドバイスをくれた。お酒なんて飲めるようになるのは五年後のことで、あたしにとってはずっと遠い未来のことだ。
「昨日は飲み会だったの？」
「そーよー。私が主賓の宴会だったの」
「……えと、何かお祝い事？」
お母さんが口を開いた瞬間、キッチンからやかんの警笛が聞こえた。
のろのろと起き上がるお母さんに、
「お茶、あたしが入れるよ」
「いいから座ってなさい。団子を買ってきたのはあやめなんだから」
お母さんの笑顔に、浮かしかけた腰を落とした。優しさと、なによりも自信に満ちた笑顔。ちっともあたしと似ていない。お母さんはなんでも人よりできて、あたしになんでも教えてくれるけど、何かを任せたり頼ったりはしてくれない。こんなふうによれよれの時くらい、お手伝いさせてくれてもいいのに。
お母さんがキッチンに行ってすぐに、玄関のドアが開閉される音が聞こえた。とんとんと軽い足音が近づいてきたので見ていたら、お父さんだった。
「ただいま」
スーツ姿で、ネクタイを少し緩めていた。とても深刻そうな顔をしていた三日前とは違い、あたしを見て穏やかに微笑んだ。あたしはお父さんの笑顔も好きだった。よく陽に干したお布団のような、じんわりとした温かみがあったから。
「おかえりなさい」
「お母さんは？」
「お茶を入れてるよ、草団子を食べるのに。お父さんの分もあるか

らね」
「そうか。買ってきたのはあやめかい？」
「うん」
「そうか……」
お父さんは、どこか遠くを見ていた。ちょっとだけぼうっとして、また笑顔になった。今度のは、悲しそうな笑みだった。
「着替えてくるよ」
「うん」
足音が廊下から消えて、やっとあたしは浅いため息をつくことができた。お父さんへのわだかまりが顔にでないようにしていたら、また体に力が入っていたみたいだ。それにあの笑顔、まるでトモにいみたいだった。
「帰ってきた？」
振り向くと、お母さんがお盆に湯飲みと小皿を三つずつ載せて立っていた。
「うん」
コーヒーテーブルに湯飲みが置かれていく。あたしの前に一つ、二人掛けソファの前に一つ、最後は一人掛けソファ、お父さんの座る場所の前に一つ。最後に三枚重ねの小皿をテーブルの中央に置くと、お母さんはソファに浅く腰掛けて、傍らにお盆を置いた。そして草団子の包みに手を伸ばしながら、
「さっきの話は後でするわ」
「……うん」
「あやめ、これ」
お母さんは、開いた包みの中を見ていた。
「どうかした？」
「どうって、こんなに食べたら夕飯入らないでしょ」
包みから取り出されたのは、上にあずきのこし餡がたっぷりのった草団子が六本。一本に団子が三つ。大きさは人差し指と親指で輪を作ったくらい。ちょっと多かったかな。

「えと、そうかな」
「……まあいいわ。夕飯は何か軽い物にするから――」
不意にお母さんの目線が外れた。
「おかえりなさい」
「ただいま」
あたしが気にしすぎているせいか、二人の声は硬いもののように聞こえた。ソファに座ったお父さんは膝に肘をついて手を組むと、その上に顎を載せた。
「草団子か、なんだか懐かしいね。それに美琴が淹れたお茶をいただくのも久しぶりだ」
「……いただきましょ」
お母さんは手際よく小皿に一本ずつ草団子を取り分けて配った。それを眺めるお父さんの横顔は、少し寂しそうだ。
「はい。いただきます」
お母さんがさっさと食べ始めてしまったので、あたしもお父さんも黙って食べだした。
水月堂の草団子はおいしかった。少し強いくらいの草の香りに、普通の団子よりも甘めの餡がよく合っていた。甘くて美味しいものを食べると、あたしの頬は自然と緩んでしまう。お父さんも目を細めて幸せそうだ。お母さんだけは、いつもと変わらない顔で黙々と食べていた。
最初に食べ終わったのはお父さんで、飲み終えた湯飲みを両手の平で挟んで持って、手持ち無沙汰そうに転がしていた。
次にお母さんが食べ終わって、お茶を一口飲んでため息をついた。
あたしはまだ、二本目の一つ目の団子を口にしたところだった。
「いいかな、美琴」
「……どうぞ」
二人が意味あり気な目配せを交わしたのを見て、大事な話が始まるのだと思った。
どうしよう。あたしが言いたかったことを口にするチャンスは今

が最後だ。なのに、口の中には団子があってすぐに飲み込めそうにない。
あたしは机を叩いた。こんなことはしたこと無かったから、加減がわからずに思っていたよりも派手な音がした。
「あやめ？」
「どうした。大丈夫か？」
二人とも、すごく驚いていた。
必死に口を動かして、なんとか団子を飲み込んだ。息が苦しくて、口で大きく息をしながら二人を交互に見た。
「あたしは、離ればなれになるのはイヤ！　ずっと三人がいい！」
お父さんが湯飲みを取り落とした。
「美琴？」
「私は何も言ってませんよ。あやめ、なぜ知っているの？」
何を、言ったの？　あたしが、何を知っているっていうの？
最初に疑問が浮かんだ後は、頭の中で気持ちと考えがぐるぐると回って、一つとして形にはならなかった。
顔が自然とうつむいて、上目に見ていたら、お母さんはみるみる不機嫌になっていった。
「なんとか言ったらどうなの」
「美琴。あやめは何も知らないんじゃないかな」
「ならどうして、あんなことが言えたのよ？」
「そうだね。でも、それが疑問なら、質問を間違えているよ」
こっちに向いたお父さんは、どこか申し訳なさそうな顔をしていた。
「どうして、離ればなれになるって思ったんだい？」
あたしはとても悲しい気持ちになった。お父さんとお母さんのどっちが好きか、そんな質問をしたのはお父さんじゃない。そうなじりたくなったけど、言えなかった。
「あたしは……だって、このところお父さんとお母さん喧嘩してばかりで、それで、こんな時に大事な話があるって聞かされて、それ

で……だから」
「もういいよ。そうだね。そんなふうに思わせても仕方ないことをしていたね。でも――」
お父さんは不意に視線を落として、床にあった湯のみを拾い上げた。それを手のひらの上でくるくると回し始めた。
「実は僕の転勤が決まってね。喧嘩していたのはその為だよ。意見が合わなくってね。僕は、一緒に暮らせたらと言ったんだけど」
「無理よ。私にも仕事はありますし、あやめだって生活を変えたくはないでしょ？」
お母さんの言葉に、あたしは頷いていた。そう、あたしは今の生活を変えたくないんだ。
「今度は美琴の番だよ」
これまでより低いトーンの声音にお父さんを見ると、なんだか暗い顔をしていた。陰というか、少し怖い感じがした。
「そうね」
お母さんの声は、逆に少し明るかった。
「さっきの話の続きよ。私、本社に異動になったの」
イドウってどういう意味だろう？　きっとポカンとした顔をしていたのだと思う。お母さんが少し困ったような顔をした。
「ようするに、私も転勤になったのよ。それも本社に」
お母さんが勤める会社の本社は東京にある。ここから電車を乗り継いで四時間くらいらしい。
「ここから通うの？」
聞くと、お母さんはまたもや困ったような顔になった。
「さすがに遠すぎるでしょ。会社が部屋を用意してくれることになっているのよ」
つまり、お父さんもお母さんもこの家を出て行くってことなんだ。そして、あたしはどちらかについて行かなくっちゃいけないんだ。理由は違ったけど、離れ離れになるのに違いはないんだ。
あたしがどっちと暮らしたいかを真剣に考えようと頑張っていた

ら、お父さんが湯のみをコーヒーテーブルに置いた。その音に顔を上げると、お父さんは深い深いため息をついて言った。
「――だからね。あやめは新山に預かってもらうことにしたんだよ……」
「あ、そう……」
あたしは立ち上がっていた。お母さんが心配そうな顔をしていた。
「あやめ？」
「お手洗い」
そう言ってリビングを出た。ちょっと一人になりたかった。
新山の家、トモにぃの家に預けられる。あそこはあたしにとって、とても居心地のいい場所。どんな生活になるかを考えるだけで幸せな気持ちになれた。
だけどそれは、あたしが失いたくなかったものでも、望んだものでもない。
あたし、けっきょく何をしたかったんだろ。
トイレに入って、大きくため息をついた。
トイレットペーパーが切れていた。

それでも明日になっていく　（2）（後書き）

というわけで、５ヶ月以上ぶりの投稿になります。

次は……三ヶ月以内を目指します。気長にお付き合い願いますっ

それでも明日になっていく　（3）

高校生活最初の期末テストの結果は、あまり良いものじゃなかった。

引越しの準備はあったけど、勉強をする時間がないってほどでもなかったし、実際に机に向かってはいたのだけど、つまりは気持ちがついていかなかったんだと思う。

目を細めて成績表を見たお母さんが、小さく鼻を鳴らして言っていた。

「これから友則くんに勉強を見てもらって、頑張ればいいわ」

頼めばそうしてくれるだろうけど、トモにぃは三年生だ。受験生なのだ。邪魔はしたくない。夏休みの宿題を矜ちゃんとネネちゃんとあたしの三人でする約束をしているから、二人に相談してみようかな。

「あやめちゃん？」

そんな物思いから現実に引き戻したのは、佳奈恵さんがあたしを呼ぶ声だった。

「あやめちゃん、疲れた？」

「そんなことないです。ちょっと、ぼーっとしちゃっただけで」

あたしは今、引越し荷物を積んだ軽トラックの助手席にいた。窓を開けて走っていても、ちっとも涼しくない。まだ午前中なのに、すっかり夏まっさかりだ。隣を振り向くと、あたしと同じように首に汗をかいた佳奈恵さんがハンドルを握っていた。

佳奈恵さんはトモにぃのお姉さんで、あたしが暮らすことになる自分の部屋の片付けと引越しを手伝ってくれている。夏休みの間ずっとこっちにいるのかと思っていたら、バイトが忙しいからと今夜には帰ってしまうらしい。家から帰るというのも変な言い方だけど。

背が高くてほっそりしている佳奈恵さんは、叔父さんにも叔母さんにも似ていない。高校生になってから急に大人っぽくなって、そ

れまで「かなちゃん」と呼んでいたのをあたしはやめていた。
「なーに？　悩み事？」
佳奈恵さんに聞かれて考えてみた。両親が別々の場所に転勤になって親戚の家に預けられることになった今は、もう悩むような余地もない状況だった。
「……悩んではいないと思います」
正直に答えると、佳奈恵さんは「ふーん」と気のない返事だった。一転、弾むような声で意外なことを言った。
「そうそう、知ってる？　友則に彼女ができたんだってね」
「えー、ええ？」
初耳だった。トモにぃに彼女ができた？　あの、トモにぃに？
「知らなかったの？　らしーよー。別に本人に確かめたわけじゃないけどね。実にめでたい」
佳奈恵さんは楽しそうだった。あたしは複雑な気持ちだった。あたしにとってトモにぃは優しいお兄ちゃんで、とても大切な人だ。恋愛のことはよくわからないけれど、クラスでも「彼女がほしい」と誰かが言っているのをよく聞くから、きっとトモにぃにとっても嬉しいことなんだろう。大切な人が嬉しいことは、一緒に喜んであげるものだと思う。けど、今のあたしはそんな気分じゃなかった。言葉にするにはあいまいな気持ちだったけど。あたしが本当に妹だったら、佳奈恵さんのように楽しげにできたのかな。
「あやめちゃんも良かったねー」
「……え？」
「ほら、これから一つ屋根の下しかも隣の部屋で暮らすわけだし、何かと心配だったんだけど。ああ、別に友則が信用できないってわけじゃないけど、物事にはハズミってことがあるしね。それが彼女がいるなら、そういう心配は考えなくてもいいじゃない。それくらいはあいつを信用してもいいし」
佳奈恵さんの言うモノゴトが何を指しているのか思い至って、またもや複雑な気持ちになった。この前、梅雨にトモにぃの家に泊ま

った時のことから、トモにぃがあたしに対してソウイウ感情を持っていないと感じたし、元々あたしはソウイウコトを考えるのが好きじゃなかった。でも……ほっぺにキスとか抱っことかならされてみたいなぁ――

「ああ、うん。余計な話だったね」

佳奈恵さんのなんだか慌てた様子に、あたしも急いで変な想像を頭から追いやった。

「え、うん。あ、もう着きますね」

車に乗っていた時間は十分くらいだったろうか。軽トラックから降りると、玄関のドアが開いていて、上がりがまちに座っているのっそりとした大きな人影が見えた。こちらに気づいてのたのたと出てきたのは、トモにぃのお父さんだった。

「あれ？　お父さんだけ？」

佳奈恵さんの問いに、叔父さんは静かに頷いた。

「千佳ちゃんと友則は？」

「母さんは買出しだ。友則は、知らん」

「なんで、ああ、もうっ、今日引越しだって知ってるくせに。友則のヤツ……」

むっつりとした顔で受け答えしている叔父さんは、やっぱりトモにぃとそっくりだった。大きな体でぶっきらぼうな態度だけど、不思議と怖かったりはしない。

「叔父さん。今日からお世話になります」

頭の中で何度も練習した（すごくシンプルだけど練習した）挨拶をして頭を下げた。

「うむ。そうだな」

頭上で叔父さんがモゴモゴと言った。

「何やってるんだか……」

叔父さんの隣で、佳奈恵さんがあきれた声を上げた。

「しかし――」

叔父さんが何かを言いかけて黙ってしまったので、あたしは叔父

さんの視線を追っていた。軽トラックの荷台には、十数個のダンボール箱があった。実は、あたしの荷物はその半分もない。残りは、家族みんなの物のうち処分できなかった物をとりあえず詰めてあった。この荷物を出した後のあたしの家は、すっかり片付いてしまって、がらんとしている。

「……友則はどこにいったんだろうな」

その声には、少し苦々しい響きがあった。

「ちょっと電話してみる」

こちらもちょっとイライラした調子で佳奈恵さんが、ジーンズのポケットから携帯電話を取り出した。耳に当てて、しばらくもしないうちに口を開いた。

「あー、友則？　あんた今、どこにいるのよ。え？　あー、そう。ふーん、ほー。へぇー。そーゆーことかー」

「これは全部、部屋に運べばいいのかい？」

佳奈恵さんの電話姿を見ていたあたしは不意をつかれて、ぼうっとした顔で振り返っていた。叔父さんのむっつり顔と目が合った。

「えと、そうです。とにかく運んでしまえば、あとは大丈夫です」

「そうか」

叔父さんは頷くと、ダンボール箱を一つひょいと手にとって、玄関から上がっていってしまった。

佳奈恵さんはまだ電話をしていて、どうやら何かを問い詰めていたようだった。

「それで？　他に言いたいことは？　うんうん、わかった、伝えておいてあげる。じゃあ後でね」

電話をポケットにしまって佳奈恵さんはにんまりと笑った。何かをたくらんでいるって感じだ。いたずらっぽい目を向けてきて、

「じゃあ、私らも運ぼっか」

「え、あの、トモにぃは」

思わず聞いてしまったあたしに、佳奈恵さんはパチパチと大げさにまばたきをした。

「あー、ケーキ買いに行ったら知り合いに会ったから、ちょっと遅くなってるんだって。昼には帰るってさ」
なんだ、そうだったんだ。しばらく間をあけて、佳奈恵さんがなぜか肩をすくめた。
「さて、軽いのはどれかなー」
「えーと、これとそれは軽いはずです」
服を詰めた箱を指し示しながら、さっきのジェスチャーはなんだったんだろと思った。
「これねー。あー軽い軽い、はい」
ダンボールを受け取りながらも考えていたら、いつの間にか佳奈恵さんがいなくなっていた。
「だいじょうぶー？」
玄関の中で、ダンボールを抱えた佳奈恵さんが心配そうな顔をしていた。
「大丈夫です」
そう言いながらも、あたしは自分がちゃんとは大丈夫じゃないような気になっていた。この頃、ぼうっとしていることが多い。夏の暑さのせいとは言いきれないくらいに。
家の中に入ると、とたんに涼しくなって、あたしは小さくため息をついた。廊下の隅にダンボールが置いてあって、台所のほうから近づいてくる足音が聞こえた。
両手にコップを持った佳奈恵さんがやってきて、一つを口にしながら、もう一つを渡してくれた。よく冷えた麦茶だった。汗をかいているせいか、とてもおいしい。
あたしが一口二口飲む間に、佳奈恵さんはコップを空にして、ふいーっと息を吐いた。
「それ飲んだら、部屋で荷開けしていて。荷物はお父さんと運ぶから」
「でも」
「たいした量じゃないし、そのほうが効率的。いいね」

言われてみたらそうだなぁと思えて頷いた。
「じゃ、コップは流しに置いとけばいいから」
台所に消えた佳奈恵さんと入れ替わりに、叔父さんが階段を下りてきて目があった。
「ん？　ああ、そうだな」
あたしが何かを言う前に、叔父さんも台所に向かっていった。
台所から話し声がしたけれど、何を言っているかまでは聞き取れなかった。また一口飲んでコップを見た。あまり減ってない。ここままじゃ、二人が荷物を運び終わる前にとても飲み終わりそうにない。
どうしたものかと考えていたら、二人がやってきた。叔父さんは手にコップを持っていて、それには水が入っているようだった。
「それじゃ、私が玄関に荷物を積むから、お父さんが二階まで運んでね」
靴を履きながらあわただしく言う佳奈恵さんに、叔父さんは「ああ」と返事した。
佳奈恵さんが玄関を出た後に、あたしにちらりと視線をよこして叔父さんが言った。
「忙しいやつだ」
あたしも同じ意見だった。こくりと頷くと、叔父さんも頷いてコップに口をつけた。
「それ、どうしたんですか？」
コップの水が気になったので聞くと、叔父さんは「んー」と小さくうなってから、
「ウーロン茶のほうがよかったんだが」
そう言ってまたコップに口をつけ、飲み干してしまった。
「ふむ」
コップを手に台所に向かう叔父さんの背中を見送っていたら、背後でドサッと物を置く音がした。
「さっさと飲んじゃいなよー」

あたしが振り向いたときには、佳奈恵さんも背中しか見えなかった。
コップをしばらく眺めた後、ぐっと飲んでみた。
「ぷぅー」
半分がやっとだった。

佳奈恵さんの部屋、これから住むことになる部屋で荷物を解いていたら、廊下からなんだかいい匂いがしてきた。ベッド脇に置いた目覚し時計を見ると、そろそろ正午だった。気づけばおなかもすいている。くーっと鳴ったので、独りで恥ずかしがってしまった。
「ただいまー」
階下からトモにぃの声が聞こえた。しばらくして階段を上がってくる足音がした。開けていたドアから廊下を眺めていたら、トモにぃがやってきて立ち止まった。
「よぉ。オフクロが昼だから降りてこいって」
それだけ言うと、トモにぃはすぐに引き返していった。
「うん。すぐ行くー」
返事だけ送ってあたしはダンボールから取り出しかけていた本を眺めた。本棚のどこに入れるのかすぐに思いつかなかったのでダンボールに戻した。衣類は全部しまったし、制服はハンガーにかけてある。あとは本を並べて、小物を置けばおしまいだ。三時には終わるかな。
段取りを決めたところで、またおなかが鳴った。
台所に行くと叔母さんが流しで何かを洗っていた。近づくと、それはザルに入ったそうめんだった。
「手伝うことありますか？」
叔母さんが振り向いて、にっこりと笑った。
「いいのよ、気を使わなくって。でもせっかくだから、冷蔵庫からケチャップ持っていってくれる？」

「わかりました」
あたしの家で使っていたのよりずっと大きな冷蔵庫を開けると、たくさん物が詰められていた。ごちゃっとした感じだ。ケチャップは扉のポケットに立ててあった。
畳敷きの居間には叔父さんとトモにぃが食卓机を囲んで座っていた。向き合って座っているのに、二人とも黙ってじっとしている。何度もお泊りしてきて昔から見慣れた光景だった。部屋の隅で扇風機が回っていて、クーラーはついていなかったけど、それほど暑くなかった。
食卓には大きな皿に玉子焼きが幾つもあって、さっきの匂いはこれだったんだと思ったら、またおなかが鳴りそうになった。ケチャップを食卓の中央よりに置いて、そっと手でおなかを押さえた。それで空腹感が押さえられるわけもなく、またくーっと鳴った。
トモにぃが見上げてきて、小さく口を開いた。何を言われるのだろうと構えていたのに、叔母さんがやってきてトモにぃは食卓に顔を戻してしまった。その視線の先、食卓の中央にそうめんが大盛りになった大きなおわんが置かれた。
「あやめちゃん、適当なとこに座ってね。今、おつゆ持ってくるから」
叔母さんの言葉に、空いている場所を見た。席として座布団が置かれているのは三カ所。叔父さんの隣、トモにぃの隣、そして空席二つと同じ側に横向きの席。あたしは最後の席に着いて、トモにぃの横顔をちらりと見た。
佳奈恵さんの言葉を思い出す。この、トモにぃに彼女ができた。いったいどんな人なんだろう。トモにぃを好きになった人って。
「どうかしたか？」
トモにぃの声にはっとなった。考え事をしていて意識していなかったけど、ずっと見ていてしまったのかも。トモにぃは何でもないような顔をしていたけど、普段から何を考えているのかよくわからないことが多い。もしかしたら変だと思われたかな。

「なんでもないよ。ああっと、佳奈恵さんは？」
「姉貴は車返しにいったよ。すぐに帰って――」
玄関が開く音がして、佳奈恵さんの「ただいまー」という声が聞こえた。
「ほらな」
「うん」
佳奈恵さんはバタバタと歩いてきて、脇に挟んで持っていた物をあたしの隣に置いた。それはバスケットボールくらいの大きさのぬいぐるみだった。オレンジ色をしたトカゲが丸くなって眠っている。見たことのないデザインだったけど、どことなく可愛い。
「これ、あやめちゃんにあげる。名前はホッカイさん」
満面の笑みの佳奈恵さんに、あたしはにっこり笑ってみせた。あたしには、ぬいぐるみに名前をつける趣味はなかったし、佳奈恵さんがそういうことをする人だとは知らなかったので、うまく笑えたか自信がない。
とりあえず手にとってみた。もふもふとした手触りが心地良い。あと、佳奈恵さんのぬくもりだろうか、ほんのりと温かかった。
「ありがとう、佳奈恵さん」
「いいのいいの」
「あら、ちょうどだったわね」
叔母さんはそう言いながらそうめんつゆの入ったガラス容器を食卓に置いて叔父さんの隣に座った。
「うん、ちょうどでした」
トモにぃの隣に座った佳奈恵さんは、小皿に玉子焼きを取ってあたしにくれた。それから、叔父さん叔母さん佳奈恵さん自身の分を取り分けていった。
「姉貴？」
「自分で取りなさい」
トモにぃの不満そうな声に、佳奈恵さんはすました顔で応えた。
そうめんをすする音がしたので目を向けると、叔父さんが口をも

ごもごと動かしていた。その隣で、叔母さんは少し困ったような顔であたしを見ていた。
あたしは首を振って、口の前で手を合わせた。
「いただきます」
あたしが言い、叔母さんと佳奈恵さんが続けたところで、またそうめんをすする音がした。
ちらりと見ると、トモにぃがばつの悪そうな顔をしていた。

部屋の片付けは結局、四時までかかった。
夕飯も終わってお風呂も上がり、あたしはパジャマ姿でベッドで横になって漫画を読もうとしていた。夕方買ってきたもので、帯に『来春ついに映画化！』とあった。ファンタジー世界の冒険ロマンスもので、これで十八冊目の人気シリーズだ。
勉強机から漫画を取って、ベッドにごろんとした。
「うえ？」
背中にやわらかく生温かい感触があって、あたしは急いでベッドから転がり出た。
ベッドにはぬいぐるみがあった。佳奈恵さんにもらったホッカイさんだ。
だけど、どこかおかしい。昼は丸くなって眠っている姿だったのに、今は前足で体を支えて座っているみたいだ。
「ひゃっ」
自分の口からしゃっくりのような声が漏れた。オレンジのトカゲが目を開いて、空色の目であたしを見ていた。
コレはなに？　なんなの？　猫のように伸びをしている、目の前のこれはナニ？
トカゲは口を大きく開け閉めしてから、ちょろりと舌を出した。細く長い、ヘビの舌だった。
あたしは頭が爆発しそうだった。なぜだか怖くはなかったけれど、

起きていることの不自然さについていけなくなっていた。
そこに、最後のトドメがやってきた。
「おや、まるでうわばみに睨まれたかわずだね」
聞き覚えのない綺麗な女の人の声がして、目の前のトカゲが口を歪めたのだ。
それが笑ったのだと理解して、あたしの視界は急速に狭まっていった。
世界が傾いていき、ふっと消えた。

それでも明日になっていく　（4）

　気がつくと夜中の十二時をちょっと過ぎたところだった。部屋の明かりがついたままだったから、照明の紐を引っ張るためにベッドから出ようとぼんやり頭で体を起こした。
「おはよう」
「んー……」
　声のほうを見ると、勉強机の上であぐら座りをして漫画を読んでいるトカゲがいた。昼に佳奈恵さんからもらったホッカイさんが、布でできた手を器用に動かしてページをめくっている。読んでいるのは夕方に買ってきたシリーズの六冊目だった。
　静かな部屋に、紙をめくる音が何度か響くうちに、あたしはこれは夢なんだと思った。だけど変な夢だなぁ。夢なのに眠いってどういうことかな。
「悪いのだけど、ちゃんと寝たいから電気消すね？」
　聞くとホッカイさんは振り向いて、しゅるしゅると舌を出し入れした。
「今いいところなんだ。五分待つといい」
　それがとても綺麗な声だったので、しょうがないなぁという気持ちになった。
「んー。五分だけだよ」
　ちょっと喉渇いてるし、水でも飲んでこよう。ベッドから出ると少し肌寒かった。寝汗かいたかな。
　真っ暗な廊下に出ると、隣の部屋から明かりが漏れていた。トモにぃのことだから、きっと勉強してるんだろうな。
　あたしはいつもの癖で、そろそろと足音を忍ばせて階段に向かった。
「あれ？」
　一階のほうが少し明るい。

降りていくと明るかったのは台所だった。そろりと覗いてみると扉が開いた冷蔵庫の前にトモにぃがしゃがんでいた。
「なにしてるの？」
振り返りつつ立ち上がったトモにぃは、何気ない顔で冷蔵庫を閉じた。手にスプーンと何かを持っている。
「プリン買ってきたんだよ。おまえも食べるか？」
「今はいいよ。水を飲もうかと思って来たの」
「なら冷蔵庫に冷やしてあるぞ」
そう言いながらトモにぃは、ダイニングテーブルに着いてプリンのふたをピッと外した。
あたしは冷蔵庫から水が入ったガラス瓶を出して、水切りカゴにあったコップに水を注ぎ、キッチンに寄りかかった。
目の前でトモにぃがプリンを食べている。とてもリアルな夢……ほんとに夢？
「ねえ、トモにぃ」
「なんだ？」
「部屋で佳奈恵さんにもらったぬいぐるみが漫画読んでるんだけど」
「そんなこともあるかもな」
トモにぃに驚いた感じはなかった。それに、あたしの話をいい加減に聞いている雰囲気でもなかった。いつもの静かな目があたしを見ている。うん、これは夢だ。トモにぃはオカルトもファンタジーも信じない人だから、これが現実なら変なことを言い出したあたしに驚くと思う。
夢なら、なにしてもいいよね。
「トモにぃ。彼女ができたってホント？」
「あー……」
少しうなってから二秒くらい沈黙があった。あたしは水を少し飲んで、トモにぃがスプーンを指揮棒のようにクルクル回すのを眺めていた。トモにぃは何を考えているんだろう？
やがてスプーンを回すのをやめたトモにぃが、ちょっとだけ困っ

た様子で口を開いた。
「なんで知ってるんだ？」
おかしいな。なんで否定しないんだろ……夢なら、もっと都合がよくてもいいのに。
「佳奈恵さんから聞いたの」
「そうか……姉貴もなんで知ってるんだ？」
悩んでいるみたいにうーんとうなったトモにぃを見ていたら、あたしは胸のあたりがモヤモヤしてきた。
「どんな人なの？　あたしの知ってる人？」
トモにぃが少し驚いた顔になった。いつもより目を大きく開けてあたしを見つめている。そうだね、普段のあたしならこんなことを聞いたりしないものね。
「そんなこと聞いてどうするんだ？」
不思議そうな目で問われて、どうするのか考えてみた。でも、思いつかなかった。
「ただ知りたいなって思っただけなの。嫌なら言わなくていいよ」
目を合わせていられなくなって、あたしは横をむいて水を飲んだ。
「おまえも知ってる相手だ。聖谷だよ」
意外な名前だった。トモにぃと同じ部活の二年生で、明るくて元気で楽しくてとてもいい人だ。矜ちゃんほどじゃないけど美人だし、何度か話をした感じではトモにぃを好きになるようには見えなかったけど。トモにぃから積極的に？　それこそ想像できない。
「意外だったか？」
よっぽど不思議そうな顔をしていたみたいで、トモにぃがちょっと困ったような苦笑いになっていた。
「ううん。でも、どうして教えてくれたの？」
「おまえは妹みたいなもんだからな」
どういうことだろ？
「こうやって教えておけば、俺が同じ立場になった時に聞きやすいだろ。俺も気になると思うからさ」

「そうなんだ」
「そうだよ」
本当のトモにぃも気にするかな。プリンを食べてるトモにぃをぼんやりと眺めながら水を飲んだ。あたし、トモにぃに気にしてもらいたがっているの？　どうだろ。そうなのかな。
食べ終わったトモにぃが片付けを始めた。ゴミを捨ててスプーンを洗う横顔を見ていたら、目だけでこっちを見てきた。
「おまえは、そういうのいないのか？」
「いないよ」
「気になるヤツも？」
「うん」
「そっか」
「うん」
こういう話をトモにぃとするのは初めてだったけど、とてもあっさりとしていた。昔から二人で話しをすると、こんな風になんでもない感じだった。あの梅雨の日だけ、どうかしていたのだと思う。
「じゃ俺、寝るわ。あんまり夜更かしするなよ」
「うん。おやすみ」
「ああ」
のたのたと大きな背中が台所を出て行った。
あたしは手元のコップに、まだ半分も残っている水にため息をついて、一口だけ飲んでから残りを流しに捨てた。

部屋に戻るとホッカイさんはまだ漫画を読んでいた。よく見ると八冊目だった。
「えと、電気消していい？」
ホッカイさんはちらりと視線をよこして、パタンと本を閉じた。
「約束の5分はもう過ぎておるしな。致し方あるまい」
なんだか偉そうな口調で言い、ホッカイさんはよいしょと立ち上

がって漫画を両手に抱えると本棚までぴょいと跳んだ。そして本をしまってから、今度はベッドまでひと跳びでやってきた。なんだかコミカルな動きだったので、昔みたＣＧアニメが思い出された。自分の意志を持ったオモチャが冒険をするっていう話だったかな。
「なにやら不敬にあたるようなことを考えておるな？」
「フケイ？」
「まあ良い。おまえ、最初は気を失うほど驚いたものを、今はずいぶんと平然としておるな」
気を失ったって、何のことだろ？
「なんと、忘れておるのか」
あれ？　あたし口に出してた？
「言わずとも知れる。私はなんでも知っている」
ええーと……ほんとに変な夢だなぁ。
「まあ良い。夜も更けたしの。はよ眠るが良い」
つまらなそうなホッカイさんの声音に微笑ましいものを感じながら、あたしは部屋の照明を落とした。
少し前まではなんともなかったのに、急に眠気が強くなっていた。
ベッドに潜り込むと、すっと意識が遠のいていった。

それでも明日になっていく　（5）

引越しの翌日、よく晴れた夏の朝、あたしは学生鞄をかごに入れた自転車で、まだシャッターの下りている商店街を抜けて長い緩やかな坂道を上っていた。大きな葉を広げた街路樹のおかげで日陰になっていて、風が心地よかった。

坂を上りきると今度は下り坂が続いていた。静かな住宅街をしばらく走ったら大きな通りにでた。通りの向こうは商業地区で、色々なビルが立ち並んでいる。

自転車を停めて、ジーンズのポッケから紙きれを取り出した。それは矜ちゃんお手製の地図で、家までの道順と目印を確認する地点がきれいな筆跡で描かれていた。えーと、ここまで来たんだから、左の信号を渡ってまっすぐ行って、コンビニを通り過ぎた次の角かぁ。あと１０分くらいかな。

地図をポッケにしまい、再び自転車をこぎだす。さっきまでと違って、日陰でもないし下り坂でもない。太陽がどんどんと高く上っていき、ぐんぐんと気温が上がっているような気がする。

汗があごを伝うのを感じて、あたしは少し急ぐことにした。

たどり着いたのは、とても大きなマンションだった。ネネちゃんから聞いていたけど、ほんとに大きい。高さだけで、あたしが住んでたトコの五倍くらいありそうだ。

矜ちゃんに教わったとおりに駐輪場に自転車を置いてエントランスに入り、地図に書かれた番号をインターホンに入力した。こういうシステムはあたしが住んでたトコには無かったので、少し緊張する。

「はい。あ、うーちゃんいらっしゃい……開けたから入ってきて」

「うん」

スピーカーから聞こえる矜ちゃんの声は少し違って聞こえたけど、友達の声が聞けたことでほっとした。
エントランスを進むとエレベーターが三つあった。矜ちゃんの話だと、階層によって使うエレベータが分けられているらしい。使うように教えてもらっていた真ん中のエレベーターのボタンを押すとすぐに扉が開いた。乗って階数のボタンを押す。静かに扉が閉まって、少しだけ揺れた。
あっと言う間に到着したロビーには、矜ちゃんがいた。いつもはみつあみの髪をポニーテールにして、ロゴ入りのシャツとタイトなパンツという服装だった。いつも編みこんでいるのに、矜ちゃんの髪は綺麗なストレートだった。あたしの髪は落ちつきがないから、いいなぁと思ってしまう。
「おはよう。迎えに来てくれたの？」
「そーいうこと。こっちだよ」
そう言った矜ちゃんの笑顔は、少しぎこちなかった。後をついて歩きながら、なんだろうかと思っていたら、矜ちゃんがどこかすっきりしない顔で振り向いた。
「うーちゃん、サタケってどう思う？」
「え？」
頭の中で、いつかの帰り道でしたネネちゃんとの会話がよみがえった。
「それって、どういう意味でのこと？」
あたしは立ち止まっていた。矜ちゃんも歩くのをやめて、体ごとこっちを向いた。
「どうって……クラスメイトとしてはどう思う？」
「んー、あんまり目立たないよね。あと、優しそうかな」
「ふぅん。少なくとも嫌いなタイプじゃないってことでいい？」
「えと、うん、そうだよ？」
あたしは嫌な予感がしていた。好きとか嫌いとかって言葉が出てくると、だいたい妙な話になる気がする。

「実はね……」
矜ちゃんが何かを言いかけて口を閉じた。
「実は？」
促すと、側にきてそっと囁いた。
「サタケとネネをくっつけようとか考えている」
矜ちゃんは真剣な顔をしていた。ボケではないみたい。冗談でもないとすると、やっぱり妙な話だ。
「なんで？」
「ネネがあれ以上バカにならない為に」
あたしは首を傾げていた。ネネちゃんはけっこう頭がいいと思うのだけど。期末の成績も矜ちゃんと同じくらいで上位だったし。それに、
「それと佐竹くんと付き合うのとどんな関係があるの？」
「うん、男は女を変えると言うし、サタケは見た目どおりの常識人だから適任だと思うんだよ」
そういう意味かと気がついた。確かにネネちゃんはとても個性的だ、矜ちゃんが心配するくらいに。
「それにね、ネネってサタケにばっかりちょっかいかけてるでしょ。あれは気に入っているんだろうね。別に男としてどうとかってことじゃないだろうけど。それに、サタケのほうもそんなに嫌ってはいないみたいなんだよ」
矜ちゃんが口を歪めて笑みを浮かべた。美人顔の矜ちゃんはこんなとき、とても悪そうに見える。
「だから、うーちゃんには協力をしてほしい」
あたしは、ちょっとだけわくわくしていた。
「うん。なにしたらいい？」
「私がこういうつもりだってことを念頭において、何もしないで」
「え？」
「だから、うーちゃんには私がいつもと違うようなことをしても、気にならないふうを装ってほしい」

満面の笑みであたしの肩に手を置いて「頼んだよ」と言う矜ちゃんに、あたしは「うん」と答えるのが精一杯だった。

矜ちゃんのウチは白を基本に明るい色調で清潔な感じがした。玄関にはどこかで見たことのある観葉植物と額に入った版画のコピーなんかがあって、モデルルームみたいだ。

勧められるままにリビングに入るなり矜ちゃんが言った。

「というわけで、サタケです」

ソファに佐竹君が座っていた。少し驚いた顔をしたかと思ったら笑顔になって立ち上がってきた。

「おはよう、桝山さん」

「おは、よぅございます」

あたしは少しだけドキドキしていた。いると聞いていなかったのもあったけど、佐竹君の学校で会うのとは違う雰囲気がそうさせた。チェックの半そでワイシャツに膝下丈のズボンを着て柔和な笑顔の佐竹君が、いつもより子どもっぽくてかわいかったのだ。

「何が、というわけで、なの番長？」

ちょっと怒ったような顔をしているのもまたかわいかった。

「細かいことは気にするな。さて、うーちゃん何か飲む？　アルコールもあるよー？」

「何でもいいよ」

リビングと続きになっているキッチンへと矜ちゃんが離れると、佐竹君がそっと近づいてきて小さな声で言った。

「ほんとにあるんだよ、ビールとかチューハイとか」

いたずらっぽい笑顔に、あたしははてなと思った。普通、お酒類ってあるものじゃないのかな？

「佐藤さん、一人暮らしなのにね」

「ええー！？　ほんとに？」

「本当だよ。僕もさっき聞いたばかりなんだけどね」

「なに二人でこそこそ話ししてるの？」
矜ちゃんの声に、あたしは佐竹君からぱっと離れた。
「えと、あの」
何を言ったらいいか分からない。矜ちゃんがニヤっと笑う。違うよ、そんなんじゃないよ。からかわれて言い訳みたいなことを言う自分が思い浮かんだ。
「番長が一人暮らししてるって話だよ」
何気ない口調の佐竹君に、矜ちゃんは口をへの字に曲げた。
「なんだ言っちゃったの。うーちゃんの反応が見たかったのに」
矜ちゃんは横を通り過ぎて、持っていたコップをコーヒーテーブルに置いた。ソファに腰掛けて、あたしに手招きしてきた。
「サタケは床」
「はい」
「クッションあげるから。あと、コップ。間違えないでね」
「はい」
うーん、これが上下関係というものなのかな。おとなしくコップを移動させて、床に置いたクッションに正座する佐竹君を見ながら、それまでの自然なやりとりにあたしは感心しながらソファに座った。
「足、崩してもいいよ」
「うん。そうだよね」
照れ笑いする佐竹君。ほんと、かわいいなぁ。あたしはトモにぃがいてくれるせいか、昔から弟が欲しかった。妹でもよかったんだけど、なんとなく弟のほうがかわいい気がするから。
ぼんやり見ていたら佐竹君と目が合った。話しかけられそうな気配を感じて、あたしは目をそらした。ボロが出たらいけないし。
「それにしても、矜ちゃんが一人暮らししてるなんて知らなかったよ」
「隠していたわけじゃないんだけどね。学校も知ってるし。元々は家族で住む予定だったんだけど、そもそもの原因だったお父さんの異動がなくなったのに手続きの関係で私と姉はこっちに来なきゃな

らなくなってね。私が中二の時に姉も出て行って、それから一人暮らしってわけ」
淡々と喋って矜ちゃんは小さく笑った。あたしはどんな顔をしたらいいか分からなかった。家族が離れているのはあたしと同じだけど、矜ちゃんはもっと小さいときからで、それに、話にお母さんのことが出てこなかった。
「うーちゃん……」
心配そうな顔で口を開いた矜ちゃんの言葉をさえぎるように、佐竹君が少し大きな声をあげた。
「番長、一人暮らしって大変？　それとも楽しい？」
「うん。どうなの？」
そう聞きながら、佐竹君ってすごいなと思った。さっき、ちょっとだけ変な雰囲気になったのに、もう矜ちゃんは笑顔になっている。考えてみると、あたしは矜ちゃんと二人だけでいることがあんまりなかった。いつもネネちゃんがいて、場がしんみりすることなんて滅多になかった。ネネちゃんが変なことばかりするのって、そういうことなのかな。
「大変だよ。家事は子どもの頃からしてたから苦労しなかったんだけど、自分の為だけにするっていうのがね。モチベーションを保つのが難しくって」
「だろうね、番長の場合は特に」
「それはどういう意味かなサタケくん？」
「なんだかんだ言って、番長って人の世話するの好きだろ。友達思いだし。僕のことも気にかけてくれるし」
佐竹君がにこりと微笑むと、矜ちゃんはなぜか不機嫌そうな顔になっていた。
「そんなにほめて、何か欲しいのかな？」
冷や冷やしながら見ていたら、ますます笑顔になった佐竹君が少し腰を浮かせた。
「レモンスカッシュのおかわりください」

「……はいはい」
「あと氷も」
「新しいのに換えてあげるってっ」
ぷりぷりした矜ちゃんがキッチンに行くのを待って、あたしは声をひそめた。
「なか、いいんだね」
「委員長と副委員長だからね」
また目が合って、今度は佐竹君のほうが先に目をそらした。見られることに慣れないあたしは、ちょっと安心していた。キッチンから、コップに氷が入る涼しげな音が聞こえた。
「佐竹くんって、好きな人いるの？」
「え？」
佐竹君がポカンと口を開けていた。あたしは頭が真っ白になった。顔が熱くなってきた。佐竹君も頬が赤い。ああ、恥ずかしい。いったい何をしているの、あたしってば！
「……まさか桝山さんにそんなこと聞かれるなんて思ってもみなかった」
「ごめんなさい、変なこと聞いて。忘れてください」
「いやぁ、別にいいんだよ。特に好きな人はいないし……それより、なんで聞いたのかが知りたいな」
佐竹君は照れ笑いのような顔をしていたけど、目が本気だった。たぶん。
あたしは助けを求めてキッチンを振り返ったけど、そこに矜ちゃんはいなかった。
「あのさ、もしかして桝山さんって」
「ちっ、違うよ！　ちょっと魔がさしただけっ」
「ま？」
キョトンとなった佐竹君に、あたしは「うん」と頷いた。
何度かまばたきをする間、あたしは視線を外さずにいた。ここで目をそらしてはいけない、そんな気がしていた。

不意に、佐竹君が声をあげて笑い出した。なにか面白いトコあったかな。
「あー、ごめんごめん。桝山さんって、面白い人だったんだね」
「え、うん。たまに、言われます……」
自分の膝に置いた手を見ながら、佐竹君は変わってるなぁと思った。それに他の男子よりはずっと喋りやすい感じがする。子どもっぽいような女の子っぽいような顔をしていて、あんまり男の子だって意識しないでいられるからかな。
顔を上げると、佐竹君が真面目そうな顔をしていた。
「桝山さんは、好きな人いるの？」
せっかく治まりかけていたのに、胸というか首のあたりが苦しくなって、顔が熱くなった。
「……えと、いないよ。あたし、あんまり恋愛とかってわからなくって。その……」
「じゃあ、僕と一緒だね」
そう言って笑った佐竹君に、いっぱいいっぱいだった頭がすっと楽になった。安心したというか、気が抜けたというか。
「僕も付き合うとかよくわからないんだよね。同じ人と四六時中一緒にいたいってどういう心境なんだろうね。友達と遊んでいて時間を忘れたり、また遊びたいと思うのは遊びが楽しいからで友達が目的じゃないよね。でも、恋愛って相手が目的なわけだろ？　いまいちピンとこないんだよね」
あたしは「はぁ」と息を漏らしていた。矜ちゃん、常識人だって言っていたけど佐竹君ってかなり変わってると思うよ。それに、こんな佐竹君がネネちゃんに興味を持ってお付き合いするようになるとは思えないよ。
「でも、もったいないね」
なんの話だろう？　佐竹君が優しげに微笑んだ。
「だって、桝山さん可愛いから、すごいモテるだろうに」
「あっ」

ごすっと鈍い音がした。忽然と現れた矜ちゃんが、佐竹君の頭にツッコミを入れていた。
「こらサタケ。誰がうーちゃんを口説いていいなんて言ったんだ？」
「誤解だよ。僕は感想を言っただけで」
「うるさいっ」
ずごっと二発目が入った。佐竹君は頭を抱えてかなり痛そうだ。
えーと、これはやっぱりツッコミじゃないんじゃないかなぁ？
「うーちゃん、ちょっと」
佐竹君の前にコップを置いた手で矜ちゃんがあたしの手首を掴んだ。
「う、うん」
引っ張られるようにしてリビングを出たあたしは、カーテンが閉じられた薄暗い部屋に連れて行かれた。ベッドと机しかない寂しい部屋だった。
ドアを閉めた矜ちゃんが、眉間にしわを寄せて小さな声で怒鳴った。
「うーちゃんが仲良くなってどうするのっ」
「えと、そんなつもりはなかったんだけど……」
「ああ、ただ仲良くなるだけならいいんだけどね。うーちゃんは自分の魅力に無頓着すぎるっ。危なかったよ、サタケに妹耐性がなかったらどうなってたことか」
あたしの魅力？　いもうとたいせい？
「いもうとって？」
矜ちゃんが器用に右眉だけ上げ下げした。
「サタケには中学生の妹がいるの。すっごい可愛いのが。しかもサタケにベタ惚れ」
聞きたかったのはそういうことじゃなかったのだけど、まあいっか。
「そーなんだ？」
「そーなの。だから妹属性には耐性があるんだけど、うーちゃんは

実の妹じゃないでしょ？」
　どういう意味なんだろ？　矜ちゃんって、たまに変な言葉を使うなぁ。
「とにかくね、サタケがうーちゃんをうっかり好きになったら困るの」
「それはないと思うけど」
　さっきの佐竹君の言葉は本当だと思う。佐竹君は誰かと一緒にいたいって気持ちが希薄で、恋愛は一緒にいたい気持ちがさせるものだと思っているから、あたしだけじゃなくて誰かを好きになるってこと、今はないと思う。
「ねえ矜ちゃん」
「ん？」
「どうやってネネちゃんと佐竹くんをくっつけるの？」
「知りたい？」
　少しトーンダウンした矜ちゃんに気圧されながらも頷いた。
「まずは二人きりにする」
　それはさっきあたしがやられたことだよ……
「それから？」
「基本的には、それだけ」
「それだけ？」
　二人きりにしただけじゃ、どうにもならないと思うけど。
「基本的にはね。でも」
　矜ちゃんはニヤリと笑った。
「実は二人の飲み物にちょっと細工をします」
　細工をするって、とても悪そうな響きのある言葉だ。
「どんなこと？」
「なんだか気分が良くなる不思議な液体をちょちょっとね」
　ますます声をひそめた矜ちゃんに、あたしは少し体を寄せた。
「アルコールですか」
「そんな感じのモノだよ」

じっと見上げた矜ちゃんは、真面目そうな顔をしていたけど、目が笑っていた。
「矜ちゃん、楽しんでない？」
「これもネネの為だよ」
本当かなぁ？　あたしはまだまだ知らないことが多そうな矜ちゃんの真意を探ろうと、その目をじーっと見つめて言った。
「あたしのにも入れた？」
矜ちゃんはふいっと視線を外した。
「入れてないよ。そろそろ戻ろっか。サタケが変に思うかも知れないし」
「そうだね」
部屋を出てリビングに向かう、少し前を歩く矜ちゃんのしっぽが揺れていた。
「矜ちゃん」
「なに？」
「やっぱり楽しんでるでしょ？」
矜ちゃんは半分だけ振り返ってにっこりと笑った。
「まあね」
うーん。思っていたより、ずっといたずら好きな性格してるのかも。
リビングに戻ると、佐竹君がすみっこで膝を抱えていた。すねてるみたいだ。やっぱりかわいい。
あたしと矜ちゃんがソファに座っても佐竹君はそうしている。矜ちゃんがジュースを一口飲んで、コップを置いた。
「なにしてんの？」
「……無言の抗議活動を」
「それ、言ったら意味ないでしょ」
「なら言わせないでくれよ」
佐竹君はすっくと立ち上がると、さっきまで座っていたとこに戻ってきた。

「番長、何か言うことがあるんじゃない？」
「さっきは悪かったよ。二回も叩くことなかったよね。ごめんなさい」
あ、やっぱりツッコミじゃなかったんだ。
「いや、回数の問題じゃなくて」
「そもそもサタケが悪いんだよ。あんた私に言ったことあるでしょ、勘違いしそうとかなんとか」
佐竹君の顔がさっと赤くなった。なんだろ、勘違いって。
「……って、そもそも僕が桝山さんを口説いたら、なんで叩いていいんだよ！？」
「ぁったり前でしょ！　人んちで人の友達を口説くようなバカはぶちのめしていいに決まっているでしょ！」
怒鳴りあったあと、二人はしばらく睨みあっていた。どうやって場をなごませようかと考えているうちに、佐竹君が口を開いた。
「……それも、そうだよね」
あ、折れた。
「わかればよろしい」
矜ちゃんは腕を組んで、なんだか偉そうだ。
「でもそれは誤解なんだよ」
「誤解されるようなことになるサタケが悪い」
「はあ、すみません」
佐竹君は本当に申し訳なさそうにしていた。
二人が一緒にいるところを見ることってそんなになかったけど、いつもこんな感じなのかな。そういえばネネちゃんは佐竹君を見てたら苛めたくなるようなことを言っていたけど、もしかして矜ちゃんもなのかな。
「ついでに思い出した。うーちゃん、サタケがあだ名の由来を知りたがっていたよ。教えてあげたら？」
「いいよー」
佐竹君を見ると、あいまいな笑顔をしていた。でも何も言わない

ので続けることにした。
「ネネちゃんがつけてくれたんだけど。あたしの誕生日が四月一日だからって、最初はワタヌキって案があったの。でもワタヌキって変な響きだから違うのにしてもらったのね。で、四月ってきゅうー」
突然、電子音でけっこう大きな音楽が流れた。
「あー、はいはい」
矜ちゃんが立ち上がって出入り口の方に行った。リビングの壁に箱型の機械がついていた。あれはインターホンの室内機かな。矜ちゃんが機械のボタンを操作すると、小さな画面に誰かが映った。
「なんだ。開けたよ」
「なんだとはゴアイサツだなー。すぐに行くからまってろよー」
「はいはい」
ネネちゃんのようだ。
矜ちゃんは戻ってきてジュースを一口飲み、
「あー、うん。サタケ、気をつけなよ」
「なんで、というか何を？」
矜ちゃんは一秒ほど佐竹君を見た。そしてニヤリと笑った。
「あんたがいるって、ネネに言ってないから」
佐竹君は考えるようなそぶりを見せたかと思うと、がっくりと肩を落とした。
「……どう気をつけたらいいのかわかりません」
ネネちゃんがこんな状況でどんなことをするのか、あたしもさっぱり想像できない。心細そうな佐竹君に、何か励みになるようなことを言おうとしたけど思いとどまった。少しだけ、さっき矜ちゃんに言われたことが気になっていた。ここで親身な態度を見せるのは、矜ちゃんの計画によくないのかも。
それでも目があったので、気持ちだけでも通じればと思いを込めて笑顔になってみた。
どうもあんまり通じなかったみたいで、佐竹君は小難しそうな顔

になった。
「ああ、太陰暦か」
「そゆことっ。今日は冴えてるね、サタケ」
どういうこと？　ええと、タイインレキってなんだっけ。
「いつもは冴えないみたいな言い方だね」
「この前は分からなかったでしょ。ちゃんとヒントもあげたのに」
「あれだけじゃわからないって。さっきの、四月ってきゅう、でやっと繋がったよ」
さっきのって、言いかけたのは旧暦。あ、旧暦って太陰暦とも言うんだっけ。って、
「早押しクイズかよ！？」
佐竹君がまたポカンとなった。あれ？　今のはイケたと思ったんだけど。
矜ちゃんを見たら、半笑いだった。
「うーちゃんは、ただいま絶賛ツッコミ修行中なんだよ」
佐竹君がポカンとした顔のままで言った。
「いや、そもそもボケてないし」
的確なツッコミだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1606d/

幸せは少ししかいらない

2010年10月10日19時28分発行